（カット）アポロ11号の記念切手（連刷）

# 韓国地質調査所
# 海洋地質部の発足

林　昇一郎

1969年9月1日付にて韓国の地質調査所に海洋地質部が正式に発足いたしました．　原子力・宇宙とならんで海洋開発が世界各国において具体的活動段階に入ってまいり　西ドイツにおいてはすでに連邦地質調査所の中に海洋地質課がおかれています．　今回韓国に海洋地質部が発足したことは　アジア諸国の中では早い方の例ではないかとみられますので　ここに参考までにご紹介いたします．

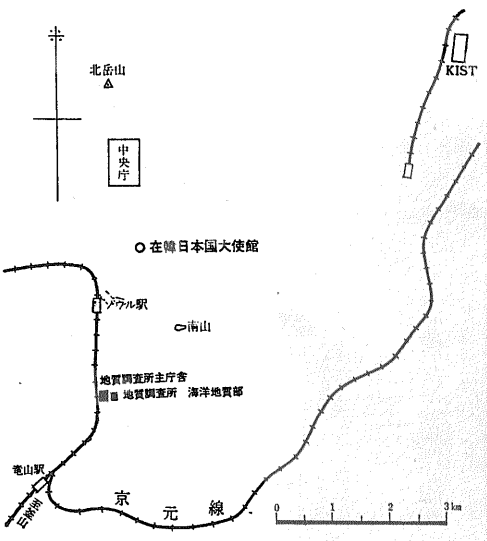
韓国の国立地質調査所の活動・機構などの概要についてはすでに本誌177号（1969年5月　27～29ページ）に馬場健三氏によって紹介されております．

現在の地質調査所の庁舎は東京駅風の建築である　ソウル中央駅の南方約1.5km の便利のよい所にあります．

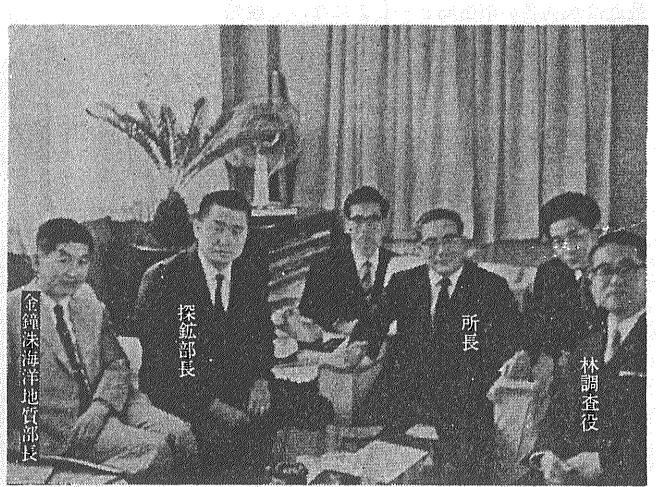
ここは以前の工場の敷地・建物にある主庁舎（第1図）と　南北の国道をはさんで東側にある建物（第1図）からなっています．　海洋地質部はこの別棟の1階に開設されました．　なお2階は商工部に属する　国立鉱業研究所（所長　玄源達氏）の事務所になっています．

主庁舎は　京釜線の土手の東に接して構内があり　列車の往来のはげしい所です．　またお隣りには　韓国ロッテのチューインガムの工場もあり　その香もただようというような所で　近い将来に　総合庁舎が財団法人韓国科学技術研究所（所長　崔亨燮博士　Korea Institute of Science and Technology 略称 KIST）の近くに建設されるように伺いました．

地質調査所は　以前は商工部に属していたのですが　1967年5月から　気象庁とともに科学科術処に所属することとなり現在にいたっています．　現在の人員は概略研究員170名　事務員30名位からなっており　その組織の概要は第1表のとおりです．　海洋地質部以外の組織の細目については　本誌177号を参照して下さい．




第1図　韓国地質調査所位置図

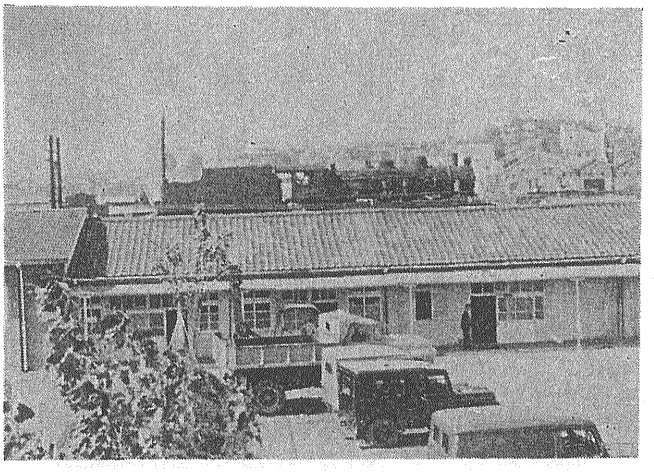



金鍾洙海洋地質部長ほか

第1表 韓国地質調査所の組織概要

国立地質調査所（所長 李 正 煥）
Lee Joung Hwan

- 庶 務 課
- 地 質 部 (General Geology) 厳 相 鎬 Uim Song Ho
  - 地 質 科
  - 図 幅 科
  - 鉱 床 科
  - 鉱 物 科
- 探 鉱 部 (Exploration) 金 元 眺 Kim Won Jo
  - 物 探 科
  - 地 化 学 科
- 海 洋 地 質 部 (Marine Geology) 金 鍾 洙 Kim Chong Su
  - 海 洋 探 査 科 (12名)
  - 海 洋 地 質 科 (10名)



地質調査所構内と列車

韓国地質調査所の現在における重点事業としては

1. 沿海資源調査（黄海における石油・天然ガスの開発）
2. 広域鉱床調査(江原道英陽の玄武岩中の銅鉱床の開発など)
3. 図幅調査（5万分の1図幅はすでに43%完成している）
4. 放射能資源調査(日韓合同調査が1969年の夏に実施された)
5. 年代決定（ジルコンを用いての Pb-α 法による決定がなされている）

このような情況下のもとに海洋地質部は発足した．当面の主要業務は つぎのものがあげられる．

1. 黄海における石油・天然ガスの探査ならびに開発． これについてはすでに Gulf 石油会社との共同調査などが実施されています．
2. 黄海の大陸棚地域における重砂の開発 その中にはモナズ石・ジルコン・砂金・砂鉄などが含まれています．また専用の調査船を持つことが計画されています．

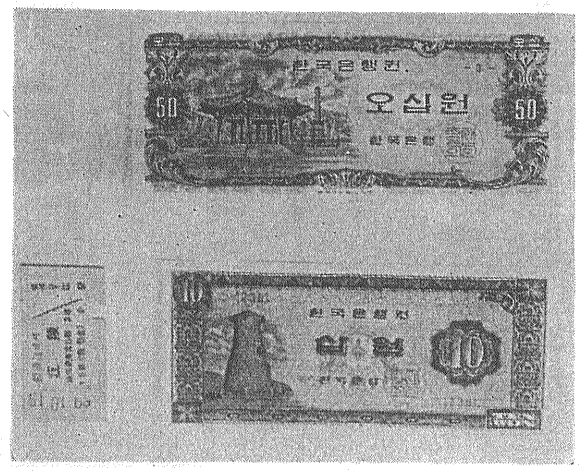
初代部長 金鍾洙氏 (Kim Chong Su) はソウル大学出身 地質調査所で15年間物理探査を専門とされ 物探科長を歴任 1965年11月東京での ECAFE 会議に出席 日本の関係筋にはおなじみの多い方です．

海洋探査科 (Marine Exploration) 科長 具滋学氏は原子力研究所を経て 物探科に移り 地震探鉱などの研修に1968年日本にもこられました． 1969年8月 米国の留学から帰られた所です． 12名で発足しました．

海洋地質科 (Marine Geology) は科長 金南長氏以下10名で発足しました．

上記の調査業務はすでに探鉱部物探科の職員を主にして 国連の活動などとあいまって行なわれて来たものですが 今回2課をもうけ専任の職員をもって実施されることとなったわけです． 今後の発展が期待されます．

（筆者は 動燃事業団資源部調査役 元鉱床部）




韓国の通貨と切符